

出前トーク通信 vol.7

出前トーク通信 vol.7 は、No.6-4「青森県の歴史（近現代・民俗）」（県民生活文化課）の様子をご紹介します。

昭和 30 年代以降の青森県の歴史の中から、「今残しておきたい仕事、後世に伝えたい職業」について説明しました。

昨今のAI化やネット通販の普及など、時代の変化によって今では見かけなくなった職業がたくさんあります。例えば浪岡町から青森市の古川までリアカーを引いて露店を出していた行商。前を通りかかると「あんただけサービスするよ」などの小粋なセールストーク。昭和 30 年代はそんな彼らの露店でにぎわっていた古川も、今では朝の 4～5 時に店を出す行商が少しいるくらいです。買い物といえば車で近所のスーパーに行き行って済ませてしまうことが増えてきましたが、当時の人々は**その土地ならではのモノ、人との交流を求めて買い物に出かけていた**のかもしれませんが。



当時のことを参加者の皆さんと話しながら振り返る中で、昭和 30 年代の当時の人々の生活を詳しく学ぶことが出来ました。三味線やアコーディオン、ギターなどを街中で演奏する旅芸人、こうもり傘の修理をするこうもり直し、下駄屋さん、産婆さん、バナナのたたき売りなど、当時の人々の貴重な写真を見ながら、まるでタイムスリップしたような気分になることが出来ました。

このように当時の人々の生活を振り返りながら、「今の若者にも共通する部分はありますよ。たとえば駅前の若者の弾き語りも旅芸人に通じるものがあります。」と、**今の若者と当時の若者に通じる部分**を紹介していました。



さらに、今回は昭和 30～40 年代の当時の人々の生活をリアルに感じるため、当時の駄菓子も写真と合わせて振り返りました。「ドン菓子」あるいは「どんきみ」、「どんまい」、「まかろにどん」、「縄かりんとう」、「鶴子まんじゅう」など、今の若者にはあまり聞きなじみのない駄菓子が当時の子どもたちにとって**いかに親しみ深く健康的な食であったか**が分かる内容でした。

作り手の後継者不足だけでなく、駄菓子を作るための器具を作る人もいなくなってしまう中で、いかにこの貴重な駄菓子を存続するかが重要になります。「添加物など無駄なものを含まない、素材そのものの良さを活かした駄菓子こそ高級菓子であるし、この魅力を若者に知ってもらうためにだめもとでも伝えていくことが重要。そのためにも**少しずつ今の子どもたちに受け入れられるように変化すること**も必要です。」という言葉が印象的でした。

今回の講座は、青森市中央寿大学のOB・OGの方々が対象でした。会場のあちこちから「懐かしい」「あったあった」という声が聞こえ、参加者の皆さんも当時のことを懐かしみながら楽しんでいた様子でした。青森県の**昭和時代の人々の生活の名残**を探しに、街に繰り出したくなる貴重なお話となりました。

そして、駄菓子の話にもあったように、昔ながらのものを守るためには、多少の変化も必要です。これは駄菓子に限る話ではなく、今後無くなるかもしれない職業についても同様に言えることで、**激動の昭和を生きた人々の知恵や経験が今を生きる人々のヒント**になるかもしれません。

